

枝幸と日食祕聞

漁村たりし枝幸に米人ダビッド・トッド博士夫人が砂金の産出すべきを告げた。然るに誰も耳をかさなかつた。明治32年頃不漁の爲、糧食の資を得んとして疑ひ乍らも砂金を探した處が何の苦も無く數百金を得た。これを聞き傳へて集る者2萬、村は急に繁昌するに至つた。

明治29年8月9日皆既食觀測の爲日米佛の觀測隊が此の地へ集つた。米國側派遣者天文學士ダビッド・トッド氏、同氏夫人、ゲリシュ氏、ペンバトン氏、フランク・トムソン氏、トムソン氏、バルトルド氏7名、佛國側は天文學士デランドル氏、海軍大尉クロール氏、ミルシヨイ氏、シメイ氏、海軍少尉ヂュマイ氏、報知船アンヂイ號船長ブデ氏であつた。不幸曇天であつた、處が8月11日に枝幸小學校新築開校式が行はれ、是等の人々參列し記念の合作揮毫が残されてある。

明治29年8月9日の日食來朝記念帳より

佛國デランドル博士の辭

Un pays, qui s'appelle l'Empire du Soleil Levant, qui a adopté sur son drapeau comme embleme un Soleil brillant doit aimer l'Astronomie.

Jennes gens, etudiez le Soleil sous toutes ses faces ; tout ce qui vit et se meut sur cette Cerre est sous sa dependance.

H. Deslandres,
astronome francais.

米國ペンバトン博士の辭

We came to your Esashi from four miles away, To see the Sun's corona but there was no display. But your smiles of hearty welcome, since we landed on your shore, Have made a sunshine our hearts, that shall last for ever more.

J. Penberton, U. S. N.

“自ら日出國と稱し光輝ある太陽を旗章とせる國民は必ず天文學を始む筈なり。少年諸氏よ、總て太陽に關する事研究せよ。我地上に生息し死没するもの一として太陽の羈絆のもとに非るはなし。”佛國天文學士アンユデラン

ドル

“忠恕 拓務省北部局長 曾根静夫”

“余が千里を遠しとせず枝幸に來りしは 太陽のコロナを見るが爲なり。コロナは見えず然れ共、郷土の笑顔は余が日本に着してより、絶えず日光をして余等に懇ならしめたり。而して是永久不死のものなり” 米國日食觀測者隨行員 ペンバトン

“培其根 北海道廳書記官 鈴木米三郎”

“利用厚生 日本天文臺長理學博士 寺尾壽”

“バラに刺あり、清泉に泥あり、曇と日食とは日と月を隠すなり” 米國アマスト大學教授 ダビツド・トッド 等々

當時三國干涉あり、我國民は激怒の極にあり、爲に米國觀測者は村人に優遇され、佛國側は迫害され、觀測所は打毀されし由。

米國觀測所は大正5年燒失した。ダビツド博士(先のアマスト大學教授)は村人の好意に報ゆる爲年々繼續して圖書を贈つて來て現在1000冊に及び立派な圖書館が出来て居る。

我國天文學史上忘る可らざる地である。

砂金發見の豫言者はダビツド博士夫人である。(延原氏枝幸紀行より)

近畿流星同時觀測計畫

和歌山、神戸、大阪、京都、名古屋を含む一帶の流星觀測者により、4月から8月までを第一期として、日時を決めて、同一方向の空を看視する計畫がある。目的は同一流星の發見で、その結果が期待される。他の地方にもこの種の協同觀測の行はれんことを切望する。(花山急報第199號より)